巻頭エッセイ

二〇一七年九月一日福島浜街道雑記

渡辺憲司

二〇一七年三月三一日、福島県浪江町の一部が避難指示解除になり、請戸の浜が立ち入りを許されることになりました。夏の終わりに請戸の浜を訪ねました。

茨城県から福島県にまたがる浜街道は、ほぼ常磐線にそった海岸線の道です。

常磐線の回復と共に私の旅はありました。東日本大震災でもっとも長い区間が運休しているのが常磐線です。四ッ倉までは、二〇一一年三月一一日の震災約一ヶ月後、四月一七日に運転再開されました。さらに、五月一四日には久ノ浜まで運転が再開されました。旅は、その時から始まりました。

二〇一七年九月一日、朝七時上野発特急ひたち一号に乗車。

四ッ倉を過ぎ、トンネルを越えると海が見えます。

久ノ浜です。

二〇一一年三月、地震の後の津波、そして火災。町の火の手は海の上に運ばれ、その火が舞い戻って町を嘗め尽くしました。

福島原発から三〇キロのこの地は、放射能被害にも襲われ、高級魚で栄えた港の時間も一時止まりました。

震災直後、五月の末、春の海、キラキラと波が光り、瓦礫にはむき出しの浴室がありました。セルロイドの黄色い小さなアヒルが、雨水で一杯になった浴槽に浮かんでいました。

小さな黄色いアヒルが本当に泳いでいたのです。波にものまれず、雨にも流されず。幻影ではありません。このアヒルを見た時でした。浜街道のことを書き残しておこうと思ったのは……。その後、毎年この道を旅しました。これはそのメモ書きです。

◇

拙著『時に海を見よ　これからの日本を生きる君に贈る』（双葉社）が刊行されたのは、二〇一一年六月一九日です。

この本は、震災で卒業式が行われなかった高校生に向かって、高校のホームページで発したメッセージ「卒業式を中止した立教新座高校三年生諸君へ」を中心にまとめたものです。メッセージは、大きな反響でした。一日に四〇万のアクセスがあり、六年半たった今、八〇万アクセスを越えるということです。

この本の中で、私は三ヶ月後の自分を次のように語りました。

「私は臆病のまま時代に流された。必要を越えた豊かさを求めた。過度の贅に身をゆだね、何が一番大切なものかを忘れていた。諸君に海を見ることへの道を鼓舞しながら、混迷した老骨の自己を、大人の自分を、眼前に直視することに、どれほど厳しかったのだろうか。私たちが今、この災害に、ことに原子力発電所の事故に際して心すべきことは、悔恨を越えた、行動を踏まえた自己反省である。……私は君たちに「海

を見よ」と語った。私が海を見た日のことを、まず語らねば、君たちの背中を押すことは出来ない。」

*

久ノ浜は、上野から三時間。ここまでは家で思い立てばその日にすぐに来ることができます。週末、一人思い立って久ノ浜に来ました。妻とも一緒に来ました。

「来週日曜日、上野駅で九時集合、来たい人は来なさい。」

終業式のあいさつでこんな風に語りかけたこともありました。生徒たちと一言も語らずに久ノ浜の浜辺を歩いたことを思い出します。

一年後の震災の日、『朝日新聞』朝刊のオピニオン面に「十八歳の君たちへ」と題した記事が掲載されたのをきっかけに、二〇一二年七月に『海を感じなさい』（朝日新聞出版）を刊行しました。

「海を感じなさい。五感を震わせて海を感じなさい。その目で波頭を見て、その鼻で潮の匂いを嗅ぎ、肌で東北の海の冷たさを感じなさい。自然を身体で感じなさい。……隊列の乱れたテトラポット。崩れた防潮堤。なぎ倒された松林。荒涼たる空き地にうずたかく積み上がるがれき。そこかしこに残る、濁った水たまり。コンクリートの基礎だけが残る住居跡。押しつぶされたクルマ。見えぬ恐怖に人影が消えた街……。そのすべてを見て、考えなさい。」

命令調でした。自分へ語りかけていたのですが……。自分に命令しなければ体が動かなかったのです。岩手の田老から、宮城の松島まで何度も遠回りしながら、バスを乗り継いで海を見たのもその年の夏でした。

二〇一三年三月一一日、久ノ浜の海に向かって、たくさんの花束が投げ込まれていました。浜辺に膝までつかり、幼子と泣き叫んでいた若いお母さんの後ろ姿。

年老いた漁師が、花供養の海に背を向け、パンくずをかもめにやりながら、「放射能で、空き巣ばっかり来る……」とつぶやいた一言も忘れられません。

自由学園最高学部長ブログ（以下ブログ）の記述です。

◇

二〇一六年六月二四日、久ノ浜駅を降りると、大きな看板が飛び込んできました。「エコタウン　舘の山　歩き始めよう新しい「ふるさと」へ　平成26年6月分譲予定」とあります。支所もガラス張りのモダンな防災センターに生まれ変わっていました。

海岸線には、突堤が築かれ、松の苗木が植えられています。数年後には松林がこの浜によみがえるのでしょう。復興のシンボルとされ、奇跡的に残った稲荷の鳥居は赤く塗り替えられていました。震災直後、この神社には、「頑張ろう日本」の旗がはためき、次に来た時には、「ここに故郷あり」とありました。その旗が神社の前に放置されています。

その日泊まった宿から、波浪注意報が出た海が見えました。震災前と同じ名前のこの宿も以前は、海岸近くの木造建築の料亭風の宿でした。ビジネスホテルに変わっています。近郊都市にあるような独身者用集合住宅です。清潔で小さな部屋です。必要なものがそろっています。電気もエコ、お手洗いも自分が動くと電気がつきます。

除染などの長期滞在の作業員の宿舎です。玄関には夕食注文のリストがありました。すべて会社名です。食事の呼び出しも会社名です。復興労働には、個人の名前が消えています。下請けのまた下請けの会社が除染作業を担っています。

おそらく、日本の労働作業の中で、最も急がれ最重要な労働は、原発放射能の除染作業です。このようなホテル住まいは恵まれているほうで

す。コンテナを三部屋に仕切り、風呂もなく、共同便所。そんな宿舎が数百も並んでいると聞きました。誰もがこの作業の必要を認めているはずです。しかしその労働条件は過酷すぎます。

二〇一六年五月一七日の『朝日新聞』は、久ノ浜、末続の建設会社の敷地の土中から一六日夜、成人男性の遺体が見つかり、建設会社社長ら従業員ら六人が、死体遺棄の疑いで逮捕されたと報じ、遺体は、「昨年秋から行方不明の四〇代除染作業員とみて確認を進めている。」と記していました。

＊

その事件の結果はわかりません。

窓の向こうの浜で時間が、波と一緒に過去が過ぎていくような気がしました。

久ノ浜の次は末続です。

末続の浜は、映画「釣りバカ日誌」の撮影場所。浜ちゃんはここの駅のプラットホームで待ち合わせしていました。潮風の通る駅です。砂浜の続く遠浅の明るい海ではカレイがよく釣れたそうです。

次が、広野です。

二〇一二年、当時在任していた高校の『学校便り』に「広野へ」と題してこんなことを書いています。

◇

昨年一二月、二学期の終業式で、ニューヨーク市立大学附属病院のリハビリセンターの壁に書かれている無名戦士の詩を紹介しました。この詩は、インターネットなどでも紹介され、また『中日新聞』などでも評判になっていますから、周知のものでしょう。翻訳は色々あるようです。

大きなことを成し遂げるために、強い力を与えてほしいと、神に求めたのに、
謙遜を学ぶようにと、弱さを授かった。
より偉大なことができるようにと、健康を求めたのに、
より良きことができるようにと、病弱を与えられた
幸せになろうとして、富を求めたのに、
賢明であるようにと、貧困を授かった。
世の人々の称賛を得ようとして、力と成功を求めたのに、
得意にならないようにと、失敗を授かった。（後略）

詩を知ったのは、一昨年コロンビア大学での講義の折ですが、この頃よく思い出します。震災そして原発事故と絶望と慚愧の思いが暗く澱んで私を包み込みます。どうしようもないような思いに、少しでも光明を見出すような気がするからです。

終業式の時に、この詩を話題にしていたら、チャプレンが聖書の次のような個所を教えてくれました。

自分自身については、弱さ以外には誇るつもりはありません。（中略）主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ。」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。

（コリントの信徒への手紙二・一二章・新共同訳）

無名戦士の詩は、戦争体験をふまえたものでしょうが、その救いにキリスト教の教えがあったに違いありません。弱さゆえに強くなれる、そんな思いに今の私は素直に頷くことはできません。しかし、いつかそう思える日に近づくのかもしれない。その日に近づくためにこの詩と聖句を記憶したいと思います。

あまりに深い失敗をいかに受け止めるか。今の私たちの課題です。

挨拶の最後に、常磐線の広野へ行かないかと、進学の内部推薦が内定した高校三年生を誘った。震災後、常磐線はいまだ全面復旧にいたらず、下り電車は、広野駅までです。（中略）

久ノ浜から、広野へ。小さなトンネルをいくつか越えて、視界が広がります。

広野駅に車輪をかたどった丸い黒い御影石の碑に文部省唱歌「汽車」の一節が記されています。

汽車

今は山中　今は浜
今は鉄橋渡るぞと
思う間も無く　トンネルの
闇を通って広野原

そして、台座には次のように記されています。

汽車の碑　建立由来

明治・大正・昭和にわたって愛唱されてきた尋常小学校唱歌「汽車」は常磐線開通により、大和田建樹先生東北地方旅行のみぎり、久之浜―広野間の景観を作詞したものと伝えられ、曲は大和田愛羅先生の作曲するところのものである。よって作詞地を記念し建立する。

建立は、昭和五七年三月。由来には異説あります。鉄道唱歌を多く作った明治期の大和田建樹が乗ったのは、広野駅の手前の久ノ浜駅まで、広野駅までは行っていないと云います。「浦島太郎」の作詞で知られる乙骨三郎の手になるという説も有力です。また作曲者を記念した碑文が、新潟県村上駅にもあるそうです。

広野原を広野駅に汽車が近づいた光景であると特定するのは無理かもしれません。しかし、トンネルを出て広い野原に出る光景が日本のどこにも見られる懐かしい響きを持ったものであることは確かです。

駅前はさびしく人がいない。九月緊急時避難準備区域の指定が解除され、一二月二二日には、福島第一原発の事故収束が政府により宣言されました。しかし、まだ多くの不安の中、広野の町に春は遠い。温州みかん栽培の北限地であり温暖な気候で知られる広野町は、「東北に春を告げる町」でした。

この町に春を呼び戻し、若者に希望を語り継ぐのは私たち老いたる者の義務です。弱さが強さを生むという言葉を背負って語りかける覚悟は、この国で多くの年月を過ごした者から、子供たちへの贖罪の痛恨のメッセージです。

あかね空が辺りを包む。広野駅発の発車ベルに変わるのは、「汽車」のメロディ。誰もが明るくこの歌を歌える日まで、私たちはどうしても前に進まなければならない。「わたしは弱いときにこそ強いからです」と、神にこたえる祈りは、行動への責務です。

＊

広野を過ぎると、右手に東京電力の広野火力発電所の煙突が見え、左手にJヴィレッジ。一九九七年日本初のサッカーナショナルトレーニングとして最先端の機能を持っていた施設。一一面の天然芝のコートなど震災まで延べ一〇〇万人が利用したそうです。その後は原発事故終息のための中継基地として利用されていましたが、オリンピック前の二〇一九年には全面再開するという報道もあります。

常磐線竜田駅着は一〇時五分。常磐線はここまでです。

竜田で原ノ町駅行きの代行バスに乗り換え、一〇時五五分に浪江駅に着きました。浪江駅までのバスはこれに乗り遅れると二〇時一〇分までありません。原ノ町行きはこの一本です。昨年（二〇一六年）六月も浜通りを訪ねましたが、その時はタクシーでした。

◇

竜田駅から、タクシーで原ノ町に向かう。

タクシーの運転手さんは五五歳、福島原発に二〇年以上勤めていたそうです。震災の時は、たまたま金曜日が休みで、いわき市に用事があり、自宅のあった楢葉町に帰る途中でした。朝、いわき市にある仮設の学校に楢葉町の生徒を送り、夕方また迎えに行くのだそうです。来年の四月には、学校が開校するので、その仕事はなくなるであろうと話していました。

楢葉町は、原発事故に伴う避難解除後の帰還状況を月毎にホームページで公開しています。

これによれば、四日以上滞在者の帰還率は、平成二八年六月三日現在、世帯一一・五％、人員七・三％です。

年代別で五歳から一九歳までは六名。

一〇％に満たない故郷帰還人数を、いかに受け止めるべきか。課題はあまりに大きく深い。

富岡駅前。海水浴客でにぎわった駅前の商店街は原発事故直後のままです。放置放射線量の計測器が駅前にあり、線量は〇・二〇六とオレンジ色の数字が点滅しています。

白いマスクをした工事車両に導かれるように富岡の海を見に行きました。

軽量放射線の廃棄物の焼却炉は、フェンスで囲まれ、ダンプカーが所狭しと並んでいます。

海岸線は放射線廃棄物をいれた大きな黒いビニール袋の壁です。

海の表情はまったく見えません。

五年三ヶ月余、富岡の海の時間はあの時から止まったままです。

多くの旅人たちが行き交った浜通り街道を北に。

緑の中を車が進む。夜の森、桜の名所としてよく知られたところです。思わず窓を開けようとして、たしなめられました。

「ここは、窓を開けちゃだめだよ。放射線量多いからね。駐車も禁止。バイクもここは通れないからね。」（参照：福島県ホームページ　ふくしま復興ステーションは、福島第一原発近くの放射線量を毎日アップしています。執筆中の六月二九日九時三〇分現在　原発に近い夫沢は一一・〇七七、南台は六・三二八、熊川は二・五六三マイクロシーベルト）

道には至る所に「獣物注意」の標識。

「たぬき、イノシシ、ハクビシンなんかが多いかな。厄介なのはハクビシンだね。以前はね、イノシシ鍋なんかうまかったね。たっぷりキノコ入れてね。今は、タケノコもだめだね。」

タクシーは、浪江町を過ぎていきます。

二〇一六年一月四日『河北新報』にこんな記事が載りました。

〈東京電力福島第1原発事故で避難し、福島県二本松市の仮校舎で授業を再開している福島県浪江町の浪江小、津島小の児童が、古里の歴史や文化を題材にした「なみえっ子カルタ」を作った。かるた作りは２０１２年度から、町の自然や伝統芸能を学ぶ「ふるさとなみえ科」の授業で取り組んでいる。本年度は授業のまとめとして、これまで作った約１００点から46点を選んで初めて印刷した。読み札は浪江の風物詩や行事などを五七五にまとめ、絵札は絵本作家の指導を受けて描いた。

〈十日市　かならず買うよ　わたあめを〉

〈大漁旗　請戸になびく　出初め式〉

など町の行事や、

〈またおいで　となりのおばちゃん　お友だち〉

と離れ離れになった友人を思う気持ちなどをつづった。

三〇〇セット印刷し、卒業生や転校生に送付したほか、仮設住宅や町民交流館に贈呈。一二～一五日には二本松市の仮役場に展示する。

浪江小の遠藤和雄校長は「かるたを通して古里を思い出したり、子どもたちに町の歴史や文化を伝えたりするきっかけになればうれしい」と話した。〉

車は、まもなく小高地区です。

浪江駅から小高駅までの常磐線運転再開は二〇一七年三月、又富岡駅から浪江駅までの再開は、二〇二〇年三月までとされています。もとより除染の進行しだいです。

私に何ができる。悲しみに寄り添う。そんな不遜な、と、思う。もしも、できることがあるとしたら、忘れないことです。論語「里仁」に「父母の年は、知らざる可からざるなり」の言があります。「知」は「覚」、記憶。「父母の年は覚えていなければならない」の意味です。父母とは生み出してくれたもの。私たちは原発事故を忘れてはならない。覚えておかねばならない。そんな思いで、東日本大震災の跡地を歩いた。二〇一六年、梅雨の間の記です。

*

バスは座れないほどではありませんが、だいぶ混んでいました。大型観光バスと云った感じです。狭いですがトイレもついています。前の方には放射線量を示すパネルがあります。

竜田駅を出るとすぐに車掌さんから注意がありました。

「帰還困難区域を通り、放射線量が多くなりますので窓を開けないようにしてください。窓からの撮影は結構ですが、バスの中での撮影は御遠慮ください。」と。一年前と同じ注意です。

「百合の花が咲いてるわ」と云ったきり同行の妻の長い沈黙が続きます。

大型スーパーの破れたままの窓。大型紳士服店の窓からは、つるしたままの服が見えます。大きなパチンコ店の椅子がひっくり返っています。教会のような、宮殿のような結婚式場の前を通った時、後ろの席で声がしました。並んで座っている人に話しかけているようです。

「甥っこがここで結婚式あげたんだ。披露宴は二〇〇人も超えたよ。酒樽も用意して、飲みすぎてさ……」少し酔っているようでした。締め切った窓で逃げ場を失ったアルコールの匂いがしました。

「がんばろう富岡」といった看板の他に、「今を生ききる」と云った看板もあります。去年は見落としていたのでしょう。昨年タクシーで通り過ぎた浪江駅前でバスを降りました。

浪江駅の前には、佐々木俊一が作曲した「高原の駅よさようなら」の

歌碑があります。信号機の前に立つと小畑実が歌うこの曲が流れます。

「しばし別れの夜汽車の窓よ　云わず語らずに心とこころ　またの逢う日を目と目で誓い　涙見せずにさようなら……」

佐々木が浪江町出身だという縁によるものです。

浪江は高原の町ではありません。農業も盛んでしたが、請戸の浜を中心とした漁業の町でした。

駅前の商店街。六年間の放置に先は見えません。

凄惨な放射能汚染の傷痕は生々しく今も続いています。

津波に襲われた町との違いを直視すべきです。

駅の近くで、家庭菜園を耕している夫婦を見かけました。戻ってきた人はゼロではありません。散り散りになった夢をもう一度集めている人がいます。避難指示解除対象地域の帰還人数は、一パーセント台だそうです。

請戸の浜を見下ろす、大平山霊園に行きました。津波で犠牲になった人の真新しい墓です。墓碑銘には三月一一日の文字と各家の墓には地蔵が並んでいます。広島の平和公園の裏手の寺の墓の事を思い出しました。

福島の現代詩人、二階堂晃子の詩「生きている声」の一節です。

救助隊は準備を整えた
さあ出発するぞ！
そのとき出された
町民全員避難命令
うめき声を耳に残し
目に焼き付いた瓦礫から伸びた指先
そのまま逃げねばならぬ救助員の地獄
助けを待ち焦がれ絶望の果て
命のともしびを消していった人びとの地獄
請戸地区津波犠牲者一八〇人余の地獄
それにつながる人々の地獄
放射能噴出がもたらした操作不可能の地獄
脳裏にこびりついた地獄絵
幾たび命芽生える春がめぐり来ようとも
末代まで消えぬ地獄

浜に立つと、福島第一原発の排気筒の高い煙突が見えます。その煙突の手前に請戸小学校がありました。

大きな小学校です。展望台でしょうか。モニュメントでしょうか。浜辺までは四〇〇メートルほどですが松林に覆われて海が見えなかったそうです。子供たちは、この展望台にあがって海を見ていたのです。壁面の時計は、午後三時三八分で止まっています。

地震発生は、午後二時四六分。三時一五分、四年生男子が少年野球の練習で知っていた大平山への道を先生に教えます。子供たち全員が大平山の山の中に入ったのは、三時二五分。小学校が津波に飲み込まれたのが三時三八分です。四時三〇分、雪が降り始めます。二年生以上の児童八一人、教職員一三人が、大型トラックで町の体育館に移動したのは、四時四〇分でした。『請戸小学校物語　大平山をこえて』（ＮＰＯ法人団塊のノープレス・オブリージュ発行、二〇一五・三）による記録です。『請戸小学校物語　大平山をこえて』は、その時の避難の様子を絵本にしたものです。

今、校舎には立ち入ることが出来ません。

校舎内の写真が入口に掲示してありました。教室の黒板には、「天は乗り越える試練しか与えない。頑張れ請戸」「福島県警察」「陸自　未来

を信じて　日本　請戸　陸上自衛隊44連隊」などといった大きな文字にまじって「卒業式の練習が始まります」の連絡が書かれています。

漁港には新しい船が数艘繋がれています。今年の二月には大漁旗をはためかせて避難先から帰港したことが報じられています。

台風の影響でしょうか海は荒れていました。

駅までのタクシー、運転手さんがしきりに「ここはカリカリ、ここはカリカリカリかな」とビニール袋を見て云います。何のことか理解できませんでした。放射能汚染廃棄物の袋の仮置き場、そのまた仮置き場、そのまたカリカリカリ置き場のことです。

今、私にできることは福島の米を食べ、福島の酒を飲むことです。

毅然とした原発反対と福島ファーストの支援が今こそ必要です。

今日九月六日、東京電力が再稼働を目指していた柏崎刈羽原発の安全審査は議論を終え、早ければ一三日にも事実上の合格証「審査草案」を了承する見通しとなったとニュースが伝えています。この原発は、請戸の浜から見えた福島第一原発と同じ型の「沸騰水型」のものです。

また、夜七時のＮＨＫニュースは、福島大学などの研究グループが、福島第一原発が立地する双葉郡の住民を対象にアンケート調査を行い、無職の人が六割を越え、生活再建が進んでいない実態を浮き彫りにし、生活年齢の一五歳から六四歳では、事故前の三倍を超えているそうです。

これでもこれでも、また仮仮置き場を増やしていくのです。

浪江発一二時一九分。仙台行きの電車は、小高まで乗客は四人でした。

二〇一六年一二月のブログでは、「原発に狎らされし愚」と題して、こんなことを書きました。

◇

一二月二日土曜日、『中日新聞』朝刊に「避難の小４に担任が「菌」新潟　いじめ相談を受けた後」との見出しの記事がありました。

「東京電力福島第一原発事故で、福島県から新潟市に家族と自主避難している小学４年生の男子児童が、担任の40代男性教諭から名前に「菌」を付けて呼ばれ一週間以上学校を休んでいることが分かった。」

記事はさらに続けて、児童が夏休み前に同級生から名前に「菌」を付けて呼ばれているのが嫌だと相談を受けていたとも記しています。愛称のつもりで云ったという報道もありました。

一一月の上旬には、横浜市に自主避難した中学一年の男子生徒が、いじめにあっていることが明らかになっています。

原発事故のために避難している生徒へのいじめは、おそらく新潟や横浜でのことばかりではないでしょう。氷山の一角と云っていいのかもしれません。

教師の配慮のなさ、軽薄さは厳しく追及されるべきです。教師としての個人的責任の重さは、対応のまずさと言ったようなものではありません。言葉が人格と関わっていることを猛省すべきです。

しかし私が強く思ったのは、そればかりではありません。

個人の責任の重さを感じながらも、私自身を含めた教師全員が心しなければならないことを今回のことは知らしめているような気がしてなりません。

原発事故後いかに自分が原発と向き合うのかといった、個人の倫理感、人生観が失われているのです。

原発事故以来、月日と共に、私たちは臆病に傲慢を重ね、危険に居直り、きらびやかなネオンに身を飾り、大切なものは何かという痛切な問いを忘れ、眼前の放射能汚染の現状を直視することなく、身の毛もよだつ全身の恐怖と悔恨は、他人事となっていったのです。

忘れてはならないことを、曖昧なものにし、〈行動を踏まえた自己反

省〉は、安眠の中での怯懦な妥協を行動と呼ぶだけとなったのです。
原発事故に伴ういじめは児童生徒のみではない。大人の世界にも広がっています。
のど元を過ぎた熱さは忘れ去られたのではありません。熱さは、他者の胸を刺す氷柱の刃先を研ぎ澄ませたのです。
新潟の教師の配慮のなさ、欠陥的思考欠如の責任を追及するのみで、このいじめ問題は終わりません。
我々はもう一度あの日に何が起こったかを、今度のいじめ問題を考える時こそ直視する必要があります。
過去という名のもとに忘れようとしている自分に、忘れてならない教訓を倫理として刻み込まなければならないのです。
忘れてしまいそうな自分がいじめへの加担者なのです。
そして、原発の再稼働を進め、放射能対策は完璧であると断言しながら過去の惨状を忘れようとしているかに見える国家責任も重い。帰りの車中、『文藝春秋』の一二月号を読んでいたら、前の学校で同僚であった桑原正紀氏の歌が掲載されていました。その中の一首。
「ほとぼりの冷めたる頃とそつと目を開けはじめたる原発いくつ」
帰宅したら家に氏の新しい歌集『花西行』（現代短歌社）が届いていました。
一一年間病床にある妻を見舞う歌は胸を打ち、定年を迎えた教師の心情に、また愛猫の死に寄せる歌にも引き込まれましたが、ここでは原発関連の歌をもう一首。
「狎らされてゐしおのが愚を思ひ知る原子力発電の安全神話に」
狎れるとは、一緒にいるうちに警戒心や礼儀を失うこと。また心がなくなって軽んじること。
狎侮（こうぶ）、侮辱（ぶじょく）、共に同じ意味です。
殊に教員は原発に狎らされてはならないのです。

＊

浪江からの下り常磐線は開通しています。浪江の次は桃内駅です。定刻通りの運行だと、地震発生の二時四六分、いわき行き上り列車はこの駅のすぐ手前を走っていたはずです。しかしこの時は、亘理近くで沿線住宅火災があり列車に一〇分の遅れがあり、立ち入り禁止となった二〇キロ圏内のこの駅近くには到着していませんでした。この駅は、小高の大悲山の最寄駅です。
立教大学ＥＳＤ研究所の雑誌（『立教ＥＳＤジャーナル』第二号、二〇一四）に「大悲山磨崖仏（福島県南相馬市小高地区）参詣記」と題して、こんなことを書きました。

◇

東日本大震災から二年一〇ヶ月、二〇一四年一月一二日に小高の磨崖仏を訪れた。二〇一二年一二月に訪れているから、約一年ぶりです。この時のことは、『時に海を見よ』（双葉社）を、文庫版として再刊した際にあとがきに記しました。
昨年の一一月二二日『福島民報』に、「平安前期の土器出土　南相馬の国史跡「大悲山の石仏」　年代裏付け、文化復興に期待」という、見出しで、「日本三大磨崖仏の一つで国史跡である南相馬市小高区小泉の「大悲山（だいひざん）の石仏」のうち、市教委が観音堂石仏で実施した初の発掘調査で、石仏の制作年代を裏付ける平安時代前期の土器が出土した。発掘は東日本大震災で倒壊した覆屋の復旧事業に伴う調査。市は避難区域にある貴重な文化財の適切な保存を進め、文化復興に結び付けたい考えだ。」と記事が掲載されました。

思い立って朝早く上野から東北新幹線で仙台へ、仙台駅から上りの常磐線。仙台駅から亘理駅まで三五分。亘理からは代行バスで相馬へ約一時間。

亘理駅は城郭風の駅舎で郷土資料館が隣接しています。この町の四七％が津波にのみこまれ、死者・行方不明者三〇五名。荒浜、大畑浜・吉田浜は壊滅的でした。小高い警察所の脇を通ると仮設住宅が並んでいました。かつて常磐線、宮城県側の最後の駅であった坂元駅は、津波により、線路・駅施設が流出した。バスの左手遠くに海が見え、荒涼とした整地にクレーンのついた工事車輛が点在しています。

福島県側の最初の駅は、新地駅。津波により、プラットホームだけが残りました。横転した電車の映像を記憶の方も多いでしょう。

モダンなガラス張りの新地役場前をバスが通過。役場前に「成人式会場」と看板があります。帰省する成人の都合にあわせ、前日に成人式を行うのです。

ＪＲ相馬駅で、約一時間半の待ち合わせ。駅近くの空地にぽつんと建った床屋に行きました。

話好きの床屋の女房の話です。

「埼玉から小高の観音さんにね。昔は亭主と一緒に行ったもんだよ。夫婦杉があってね。放射能で立ち入り禁止になったけどね。今はあすこも日帰りができるんだよ。子供も授かるんだってね。石に彫ってあるから何だか気持ち悪いような仏様だけど。古くから御利益あるってね、この辺の人はよく行ったんだ。お堂の隣に泊まるところもあったね。もう行けないよ。亭主がひと月前に死んでさ。風呂でぽったりさ。久しぶりに店開けてみたんだけどね。成人式だからね。あれ、お湯出ないね。お客さん、後で髪洗いましょうね。そこに賞状あるでしょ。孫が小学校四年の時に絵のコンクールで賞取ったのさ。内の婿さんの血だと思うね。ハイハイ。地震は大変だったよ。隣にあったビルもその隣もみんな倒れてね。揺れがおさまるまで駐車場に寝そべっていたんだよ。私の家は少し前に普請してたからもったんだね。倒れれば保証金も少しは入ったんだけどね。小高の人も保証金入るんでないの。でもね家も何も無くなったらどこにも住めないよね。ああ嫌だ嫌だ……。代行バスじゃね。原ノ町までも電車少ないしね。これじゃ駅前っていえないよ。駅にくっついて新しい床屋があったでしょう。こっちによく来たね。まあ、あっちは若い人が行くんだよ。こっちは馴染みだけだね。あれ、雨かね……。この辺は雪降らないよ。ほとんどね。暖かいんだよ、いいトコなんだけどね。常磐線ももう終わりかね……」と……。

奥で娘さんの声。「かあさん。お客さん乗り遅れるよ。あと五分ないよ。」

「トニックたっぷりつけとくね。かゆみ消えるからね。すまないね。組合に入っているからね。釣り銭ないから五〇〇円まけとくよ。いつでもいいよ。」と女房。

駅に駆け込み、ようやく電車に間に合いました。

相馬駅から原ノ町駅まで、約二〇分。原ノ町は南相馬市の中心、震災前、原ノ町の駅そばは「駅そばキング」とテレビで取り上げられ、駅弁も七種類ほど売られていました。乗車人数は二〇〇〇人を越えることもありましたが今は約四分の一に減少しました。駅そばは駅前の店で売られているそうだが休みのようです。駅前のタクシー乗り場には三人ほど並んでいました。ここから常磐線は広野まで休止状態。原発事故収束のめどが立たないまま回復の見込みはたっていません。小高の大悲山へはタクシーで二〇分ほどです。

小高地区に入ると、途端に物音がしません。まったく静かです。昨年は、立ち入り解除後、まだ日が浅いせいだったのでしょうか、信号機は

赤のままでしたが、それでも何とか、数人の人と出会いました。今回は連休のためでしょうか、磨崖仏まで、タクシーの中からですが、人に出会うことはありませんでした。駅前通りの交差点には、半壊した住宅が地震の大きな爪痕を語るように放置されています。クラシックでおしゃれな感じの喫茶店の前のメニュー用黒板には、白いチョークで「がんばっぺ小高」と強い文字が書かれていました。その喫茶店の前を通ると、たしかに去年と同じようにその文字は書かれていましたが、弱々しく消えかかっています。

小高は中世の古城跡を持つ、蔵の多い、和菓子のおいしい町でした。また近年は、隠れたラーメンのおいしい地区としても一部マニアには知られていました。

小高地区は、原発から二〇キロ圏内で避難指示地域となり、原発事故後、警戒立ち入り禁止地域に指定されていたが、現在は、宿泊は禁止されていますが、日中の立ち入りは自由になり、避難指示解除準備地域です。将来の居住に向けて整備計画が立てられることになっています。しかし、電気・水道などのインフラが未整備で、住民は、戻りようにも戻ることができません。観光案内所を兼ねていた街道の馬つなぎ場も、階下に瓦礫が整理されています。

それまで一言も発しなかった運転手さんが重くゆっくり口を開きました。

「使っていない家に戻れるったって、戻れるわけないさ。全部壊せばいいのさ。早く除染もできるんじゃないの。」

一二〇号線、浜街道を泉沢地区に入って、浪江町まで約五キロの辺りを山側に少し入ります。

樹齢一〇〇〇年を越え、四五メートルもある天然記念物の大杉が目印、杉の脇の階段を上って薬師堂があります。堂内に入ると自然に電気がつく。仏たちは、保護のため、ガラス戸で仕切られ、堂内には、千羽鶴や参詣旗は置かれていました。

石仏は藤原時代のもので、約二メートルを超す大きな半肉彫りの座像が中心です。他に立像・線彫りなど一〇余体が刻まれています。ガラス越しですが、後背に彩色が施されているのがわかります。

大杉の裏には、小高町指定文化財の第一号、『裏刳蓋付舟形刳抜石棺』があります。六世紀頃につくられた古墳の石棺と推定されていますが、この石棺とほぼ同じものが浪江町にあり、その近似性も指摘されています。

薬師堂のある大悲山一帯は大蛇伝説に基づいて、「大悲山大蛇物語公園」となっています。大蛇と琵琶法師の悲しい物語です。ここは紅葉の名所としても知られていました。整備された公園ですが、荒んでいました。

薬師堂から道を引き返すと、阿弥陀堂。ここにも石仏が彫られていましたが、剥落していて、状況をうかがうことはまったくできません。そばに夫婦杉があり、杉は台風で倒され、現在一本のみです。相馬の床屋さん夫婦が参詣したのも、この夫婦杉でしょう。「霊木　樹齢壱千百余年　大悲山の大杉　古くからお百度巡は特に縁結安産長寿満足に霊験あり　大悲山慈徳寺」と説明書きがあります。

さらにかつて旅館として営業していた所の前を引き返すと、観音堂があります。岩窟は、間口一四メートル余、奥行五メートル余、高さ五メートル余（観音堂前の案内板による計測）で正面上方に大きく十一面千手観音があり、観音の後背の壁面には、無数の仏（賢劫千仏）が薄肉彫りされています。

先に記したように、今は発掘調査と覆屋の修復作業中で、観音の前には、ビニールシートが敷かれ、立ち入り禁止の札が立っていました。

地震での崩壊後、はじめての本格的発掘調査が始まったことは、新聞記事で紹介しましたが、仏は地震により、自身のあり様を世間に示したと云えるのかもしれません。現地では、昨年一一月二二日に大悲山石仏保存修理委員会が開かれ、今年度内に覆屋の設計が終わり、来年度に施工が予定されているということです。

貞観一一年（八九六）に、マグニチュード八以上の大地震による大津波がこの地を襲ったことが、独立法産業技術総合研究所の地質調査で明らかになっています。それは東日本大震災以前の報告です。大悲山の石仏はおそらく貞観の大地震発生の時期とさほど違わない時期にできあがったのでしょう。仏には歴史の教訓が刻まれていたのです。

大悲の石仏は、復興への道を歩み始めたと云うことでしょう。しかし、仏は信仰によって支えられるものです。参詣人のいない仏はその魂を失います。そしてそれは人の魂をも祈りをも奪っていくのです。

原発事故を忘れないという。津波を忘れてはならないという。原発事故後ふるさとへ帰還は無理であろうという。放射能汚染は解決しないという。私には沈黙しか受け手がない。それでもと思う。何か行動ができるのではないかと思う。殊に七〇歳になろうとするこの年寄りに何ができるかと問う。

祈りは教訓です。私は、福島の石仏や野仏に祈ることを忘れまいと思う。仏は安らぎを与えてはくれまい。小さな行動への勇気を与えてくれそうな気がします。

日が暮れてきました。海水浴と松林、そして初日の出でよく知られた村上海岸を回って原ノ町に戻りました。海は暗く、黒く、冥い。波の音だけが繰り返されています。

亘理から仙台へ。明るい電車の中では帰省した成人式帰りの華やかな声がしました。

*

大悲山の石仏の周辺は、見違えるようになっていました。石仏の前には、きれいな大きな門がつくられていました。むき出しだった摩崖仏は、保護のためでしょう、閉じ込められたような感じになりました。私は震災以前の摩崖仏を知りませんが、おそらく全体の感じは異なったものではないかと思います。震災をすっかり忘れたようなたたずまいに、貴重な文化財の保護がなされたことにうれしさを感じながらも、どこかに震災で傷ついた仏の思いが語り継がれていないのではないかと思いました。祈りを待つ仏たちには、安堵と悲しみがまじりあっているように見えました。

駅の近くの埴谷島尾記念文学館も開館していました。埴谷雄高も島尾敏雄もここで生まれたわけではありませんが、島尾の父母は小高の出身でした。埴谷雄高は、本名般若氏です。般若は相馬家家臣です。雄高は、小高の地の読みにちなんだものです。共に小高を故郷の如く愛していました。

戦争を真正面から、群れからとしてではなく個として受け止めた二人は、強い反骨の人でした。原発事故で深い傷を負った故郷に向かって、二人が生きていたらどんなメッセージを発していたでしょう。

店先のメニュー用の看板に「がんばっぺ小高」と記した、小高で大人気であったクラシックな洋菓子店は、原の町駅から、海辺の方へ四キロほど行ったところに移転したと聞きました。津波により壊滅的被害を受けた海岸線に近い丘の上だそうです。新たな地で復興のシンボルになっているようです。今回の旅では、立ち寄ることができませんでした。

小高の老舗ラーメン店「双葉食堂」もよく知られています。このラーメン店は、震災後七ヶ月で鹿島地区に再開され話題になりましたが、昨

年六月には以前と同じ小高の駅前で再開しました。
私が食べたのは、辛みの効いたもやしラーメンです。鶏ガラのいい味でした。
駅前で電車を待っていると、孫と同じ、三歳くらいの子供が大きな声をだして、私に手を振っています。「バイバイ」と云っているようです。
その時、私は、久ノ浜からここまで一人の子供の姿を見ていないことにふと気がつきました。
瓦礫の中の浴槽で浮かんでいた黄色いアヒルを思い出しました。
一四時二〇分小高発。仙台で新幹線に乗り換え、上野に着いたのは、一八時過ぎでした。

［付記］ブログ（https://www.jiyu.ac.jp/college/blog/category/ga）など既出の文章に関しては、適宜修正を施しました。

（わたなべ・けんじ　自由学園最高学部長／立教大学名誉教授）